



禁じられた華壇

三好徹



禁じられた華壇

昭和四十四年八月十日印刷
昭和四十四年八月二十日発行

定価

五〇〇円

著者

三好徹
みよしとあつる

発行者

星野慶栄

印刷所

図書印刷株式会社

製本所

田中製本株式会社

発行所

毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区竹平町

〒五三〇 大阪市北区堂島上

〒八三三 北九州市小倉区紺屋町

〒四四三 名古屋市中村区堀内町

©一九六九 三好徹（検印省略）

目次

絨毯バー
七

狂心
六

女の城
五

ネクタイ・ピン
四

野心家
三

華展
二

新世界 三

早春 二五

いけばな使節団 二六

摩天楼 二七

亡び行くもの 二九

比叡山 三〇

装幀 安達瞳子

禁じられた華壇

絨毯　　Ⅰ

I

左近山京介が目覚めたとき、かたわらに寝ているはずの女の姿はなかった。京介はそのままの姿勢で、病院の一室じみたホテルの天井をじっと眺めた。閉めきったブラインドの合間からは、明るい朝の光がさしこんでいる。時計を見ると、すでに十時近かった。

寝過ぎしたか、という思いがまず京介の胸をかすめたが、すぐにかれは、きょう一日まったく予定のないことに思いあたった。

京介は勢いよく毛布をはねのけた。

部屋のなかには、ひどく静かであった。静かすぎるともいえた。かれは手ばやく肌着を身につけはじめたが、そのときになって、たぶん入浴しているのだろうと考えていた女が、完全に姿を消してしまっていることに気づいた。

前夜、初めて会った女である。名前も聞いていなかった。

一晩の情事を愉しむといった雰囲気は女にあり、そして京介の方でも、そうなることを拒否する事情はなにもなかった。だから、記憶に残っているのは、女の顔かたちではなくて、むしろ躰であった。はじめは、街の天使かと思ひ、京介はそれでもかまわないという気持でこのホテルに入ったのだが、金銭的な話は、ついに一言もかれらの口にのぼらなかった。

京介はサイドテーブルに置き去りになっていた、外国タバコの箱をとりあげた。女の吸っていたものであった。かれは国産を愛用していたが、前夜からさらに今まで、寝る前の一服も、彼女のそれをもらって果たした。

どういう女か知らないが、こづかい銭を渡せばよかったという思いが京介をとらえた。当分は他人にこづかいを渡すことなどもできそうにないが、彼女ならばことし最後の対象として、さして惜しくはないように、京介は感じたのである。

しかし、左近山京介は、間もなく自分の思い違いを悟らねばならなかった。洋服を着てポケットに手を入れたとき、何枚か残っているはずの一万円札がきれいに失せていることを発見した。じっさいそれは、最後の最後ともいうべき金であった。

やられた！ という小さな咬きが京介の口からもれた。憎しみをこめて、やりやがった、といってもいいのであるが、

相手に對して怒るよりも、自分の迂闊さうがたに對して苦笑したい
氣持の方が強かった。

女とかわした会話の断片が、京介の内がわに甦よみがへってきた。

「あなたのお仕事はなにかしら？」

「なんだと思う？」

「見当がつかないわ。でも、銀行とかお役所とかいった堅い
お勤めじゃないわね」

「そういうことが氣になるのか」

「いいえ、べつに。ただね、あなたみたいなタイプの人が好
きなよ。行動的というのか独断的というのかしら、わたし
って、それでも男の人のことは、かなりわかるのよ」

「その年でかい」

京介のひやかしきみの言葉に構わずに、その二十五、六の
えたいのしれない女はつづけた。

「いづれにしても、あなたは人に使われるタイプじゃないと
思うわ」

「ほう、どうしてそう思うのか、後学のために聞いておきた
いもんだね」

「わたしに、というよりも女に對する接し方でわかるのね」
と彼女はいたずらっぽく眼をキラキラと輝かせて、京介の
鼻に手をのばしてきたものだった——

この左近山京介にいったい喰くわした見事さをはめてやって
もいい、とかれは新しいタバコに火をつけながら考えていた。
が、もちろん感心していられる状況ではない。さしあたり困
るのは、このホテルの払いをどうするかであった。きのうな
らば、事務所へ電話をかけて、金を持参させればよかった。

この日は、もうそれが不可能になっていた。左近山京介が
率いていたPR会社は、数ヵ月にわたる悪戦苦闘の末、その
短い生命を終えたばかりなのであった。借りていた事務所は
は、もう新しい借主が入っているにちがいない。

京介は立ち上がった窓の外を眺めた。

みぞれが降っていた。通行人は、傘をさしているの、ど
の顔も三階の京介からは見えない。京介はそのとき、自分と
社会とをつないでいる絆きずながぶつりと絶ち切られたような、
いいような孤獨を感じた。

2

ホテルのマネジャーは、京介の話を聞くと、いやに丁寧な
口調でいった。

「そうおっしゃいますと、現在お持ち合わせがないというこ
とでございましょうか」

こいつの丁寧さには棘があるな、と思いながら京介は答えた。

「そういうことだ。全財産をもつて行かれてね、大いに参ったよ。彼女も、せめてホテルのことを考えて、ここの料金くらいを残してくれたらよかったんだが、そこまでは気が回らなかったらしいな」

マネジャーは眉を寄せた。

「のんきなことをおっしゃっていちや、困りますよ。ちゃんとお払いいただかねば大いに迷惑します」

「それはそうだ。おれはホテルに女といっしょに泊まった。だから二人分の宿賃は払わねばならん。これは理屈だ。しかし、だ。払いたくとも、払う金を持って行かれてしまった。まったくどうにもならん」

「どうにもならんから、払わんとおっしゃるんですか」

「まあ、あわてるな。払わんとはいっていない」

「待て、とおっしゃるので」

「そうだ、こうしよう」

京介は、はめていた腕時計をはずし、マネジャーの前に突き出した。

「金策してくる間、これを預かっていてくれ。型は古いがね、機械は正確だ。それに、これは亡くなったおやじの遺してく

れた形見で、おれにとつては、きわめて大切な品物だ」

マネジャーは、掌にのせた腕時計を観察したのち、

「いけませんねえ、こんな時計じゃ。いまだき、こんな古ものじゃ、質屋だつて千円も貸しませんよ」

「なにをいうか。おれにとつては、命から五番目くらいに大事な品だ」

そういいながら、二番目は何だろう、三番目は何かな、と京介は考えていた。

マネジャーの態度が少しずつ変化しはじめた。

「冗談じゃありませんよ。こんな時計で料金をバーにしようなんて、ムシがよすぎるじゃないですか」

「バカいうな。ここのホテルの料金なんかにかえられるものか」

マネジャーは薄笑いをうかべた。

「でしたら、払っていただきますしょう」

「わからんことをいうなよ。金策する間、待てといっているじゃないか」

「そうすると、金策のあてがあるわけですか？」

「ある」

きっぱりといってから、京介は少し後悔した。

果断、といえは聞こえはいいが、要するに言葉が反射的に

飛び出すのである。それはかれの習性のようなもので、ときには内がわにある意識よりも先行することもある。PR会社の経営にまずいたのも、考えてみれば、これが一つの原因になっているかもしれない。だが、かれ自身はそれを矯正しようなどと考えたことはなかった。三十近くになるまで、そういう生き方で過ごしてきた。そのために多少の損をしたことはあるかもしれないが、ひとりの男の人生において、多少の損がなんであらう、といった気持ちだった。むしろ、自分の言葉に自分がひきずられ、考えていてはとも実行できそうにない仕事に挑み、曲がりなりにもやり遂げたことだって、何回となくあるのだ。

「そうとも、あるさ」

と京介は繰り返していった。そして、いつてから、この小さなピンチを救ってくれそうな友人がいなかったのかと忙しく考え出した。

「あるある」

京介は明確に言葉を出してから、あつけにとられているマネジャーをしりめに、電話器をとりあげ、交換手に、国土電工の東京支店の番号を調べて、つないでくれるように頼んだ。

大阪に本社のある国土電工は、従業員五万人という、業界屈指の大メーカーである。夏本武は、大学を出るとすぐに入社して、いまは東京支店の秘書室係長であった。

夏本武が、左近山京介から電話をうけたのは、大阪へ出張する相馬専務を東京駅まで送って、秘書室に戻ったばかりのときだった。女子社員から、左近山の名前を告げられたとき、夏本は反射的に、ヒゲのこい左近山の風貌を想い浮かべ、最後に銀座のバーで出会ってからすでに数ヵ月がたっていることに気がついた。

あのとき、左近山は意気軒昂たるものがあつたが、その後はどうしているだろうと思いつながら、夏本は受話器をとった。「やあ、おれだ」

という京介の声が夏本の耳にとびこんできた。夏本の方が「もしもし」と呼びかける前に、気配で察しなかった。女子社員から名前を聞かされていなくても、それが京介であることは夏本にわかったにちがひなかった。そういう言葉、つかいは、夏本の知っているかぎりでは、この左近山京介という男しかしないものであった。

「きみか」

と夏本は、いくらか構えるような感じのいい方で応じた。

「ああ、おれだよ。いま忙しいかね？」

「ちょっとくらいならば、あいている」

「ちょっとくらいというのは、何分間くらいだ？」

「十五分か二十分……」

「なんとか三十分くらい、都合してくれないか」

「なにか用かい？」

「そうなんだ。いま、おれは、ちょっと参っている」

「参っている？」

「そうだ。おれがそういうからには、よほど参っていると思
つてくれ」

夏本は苦笑した。

「で、どうしろ、というんだい？」

「ちょっときてもらいたい」

「どこへ？」

「代々木の連れこみホテルだ」

相手の言葉を繰りかえそうとして、夏本はあわてて口をつ
ぐんだ。秘書室長は、相馬専務に同行して大阪へ発ったが、

何人かの社員が部屋にはいる。

「どうして、そんなところにいるんだい？」

「どうしてかだつて？ おいおい、しっかりしてくれよ。決
まっているじゃないか。女といつしよに泊まったからいるん
だ。さもなければ、こんなところに用はない」

「そういう、いいことをして……」

京介は、夏本に最後までいわせなかった。

「そう早のみこみするな。それが、もっともいいことじゃな
い。じつは、女に有金をそっくり持ち逃げされてな。出るに
出られぬ籠の鳥というさまだ」

「すると……」

「察しがいいな、きみは。すぐにきて、金の鍵でこの左近山
京介を解放してくれよ」

「身勝手な男だな」

「そうか、いや、そうかもしれない」

それを聞いて、夏本は、京介のやつ、本当に参っているら
しい、と思った。そういうことは、めったにいわない男なの
だ。

「きみの会社の人間はいないのか」

「おれの会社？ じつはな、あいにくと一日違いで、きのう
潰してしまつたばかりだ」

「しょうのない男だな」

といいながらも、夏本はふと想い出したことがあった。そ

それは、相馬専務に、東京駅で依頼されたことを想い出したのである。

「夏本君、きょうの午後、家内からきみのところに電話がかつてくると思う」

と相馬はそのときいった。

「はあ、なにか……」

「節子かね」

相馬はそういつて、一息入れた。相馬は四十八歳になるが、かれの妻の節子は十五歳年下であった。夏本は、相馬節子の色の白い端麗な面立ちを脳裡に呼び醒ましなが、黙ってその先の言葉を待った。

「節子がね、こんど新年そうそうに東京のデパートで開かれる華道展の出品作の参考にしたいそうだが、近ごろ流行の絨毯バーとかゴーゴークラブとかいうものを、ちょっと覗いてみたいというんだ」

「華道展の参考にでございますか」

「うむ。こんどは、現代生活と華道芸術というのがテーマになっているとかだね。それも前衛的なものを狙っているらしい。桃山流も、いつまでも伝統に固執してはいられないんだろうな」

華道界には、さまざまな流派があつて、その中のめばしい

ものだけでも二百余派といわれている。京都に本部のある桃山流はもつとも古い流派の一つであるが、それだけに、保守的な流れが強かった。

夏本は、いけばなの世界について、とくにくわしい知識をもっているわけではなかったが、それでも相馬節子が桃山流東京本院の有力な作家であり同時にパトロンであることは知っている。また、そういうことを心得ていなければ、秘書の仕事はつとまらなかつた。

しかし、絨毯バーとかゴーゴークラブとなると、夏本は知識皆無といつてよかつた。営業や宣伝畑の社員ならば、そういう場所に行く機会もあるだろうが、秘書室にいる夏本には、まるで縁のないところだつた。

夏本は辞退したかつたが、おりから響きわたりはじめた発車のベルのために、それを口に出すひまがなかつた。

ベルが鳴らなかつたとしても、たぶん、夏本は辞退しなかつたであらう。専務に依頼されたから、ではなかつた。相馬節子が夏本を夫の秘書としか見てくれず、あるいは個人的な関心の対象とはなりえない存在であらうとも、夏本は相馬節子と何時間かをいっしょに過ごせることで、みちたりた想いを味わはずだつた。

夏本は、相馬専務の依頼を果たすについて、左近山京介が

きわめて便利な男であることを思いついたのである。

夏本は、いぜんとして、助けてくれとも頼むとも口に出さず、なにか勝手なことを喋っている電話の京介に、

「それじゃ行くから待っているよ」といった。

相馬節子と左近山京介を会わせればどうなるかまでは、そのとき思い及ばなかった。

4

夏本がそのホテルの一室に入って行くと、左近山京介は、ベッドの上にむっくりと起き上がって、まるで遅刻した部下を叱りつけるような口調でいった。

「遅いな、きみは！　いったい、何をしていたんだい？」
「何をしていたかだって？」

夏本の声は自然に鋭くなったが、京介は平気な顔で、

「まあ、いい。遅れてもきてくれたんだ。文句をいってば罰があたるかもしれないな」

「あたりまえだ」

そうきめつけながらも、夏本は、いまいましくてならなかった。

学生時代から、いかなる因縁があったのか、ずっと同じクラスだった。だが、よくよく考えてみれば、夏本にとって、それは悪しき因縁と呼ぶべきものかもしれないかった。

授業の代返、試験前のノート貸し、あるいは昼食やコーヒーのおごりなど、何かを提供するのは、つねに夏本のがわであった。左近山京介に何かをしてもらったという記憶は、夏本にはほとんどなかった。

夏本は、用意してきた一万円札入りの封筒を手渡ししながら、
ともかく外へ出よう、といった。

京介は、すぐさま、封筒を破いて中をのぞきこみ、たった一枚か、といわんばかりの表情をしてからポケットにしまいこんだ。

フロントで釣り銭を受け取ると、京介は大腿に歩いて表通りへ出た。そして、ちらつと腕時計に眼をやってから、快活にいった。

「ちょうど昼食の時間だな。お礼におれがご馳走しよう」

「あきれた男だな。もともとは、こっちのお金じゃないか」

「お金はだれのものだっていいじゃないか。これは、おれの昔からの考えだが、死ぬときに十億円の貯金があったとしても、それまでに使った金額が一千万円にすぎなかったやつは、一千万円の一生にすぎない。アメリカのなんとかいう富豪は

数百億ドルの財産を残して死んだが、死ぬまえの二十年間くらいは、トーストにミルクの食事しかとらなかったそうだ。それが輕蔑していた貧乏人よりも、貧しい食事をしていったんだ。こんなのが富豪といえるかね。つまりは、そういうことさ」

「変な理屈だな」

「変なものか。こんな筋道立った考え方はないと思うがね」
通りのわきに、二軒のレストランが並んでいた。京介は、なんのためらいも見せずに、造りがスマートで値段の高そうな方の店へ入った。

京介はコールドビーフにサラダを注文し、夏本はスパゲッティを頼んだ。夏本としては日ごろの習慣に従って軽い食事を頼んだのであるが、注文してみると、値段の差額分だけ相手よりも貧しい人間のような気がして、妙に腹立たしかった。それから思いついて、かれは精一杯の皮肉をこめていった。

「会社がつぶれたそうだな」

「ああ、つぶれた」

「きみのやり方が悪かったんだろう」

「世間の連中はそう見るだろうな。しかし、悪くはなかったさ。ただ、おれの考え方が進みすぎていたんだな。だいたい、いまの世の中は、あらゆる面がぐちゃぐちゃと固まりすぎている。つまり保守的になっていて、新しいものを、とかく排除しが

ちなんだ。考えてみると、おれは、どうも二十年遅く生まれたいらしい」

「戦後の混乱期なら一旗あげられたというのか」

「あげたかどうかはわからん。だが、いまよりもやり甲斐があっただろうな」

ほかの人間の言葉ならば負け惜しみに聞こえるはずなのだが、左近山京介の口からいわれると、いかにももっともらしく聞こえるのである。夏本は、話題をかえることにして、絨毯パーへ案内してもらえまいか、と事情を説明した。

5

左近山京介は、夏本と別れると、自由ヶ丘にある自分のアパートに戻った。二部屋にダイニングキッチンという造りであるが、かれは部屋の仕切りを全て取りはらって、使用していた。

かれは洋酒の置いてある棚からウイスキーを一本ぬきとり、タンブラーに注ぐとしたが、そのびんは空になっていた。

「どうもついでいないな」

と京介はつぶやいた。それから、かつて友人に、独身者は